

『東京美術学校校友会月報』記事抜粋

東京美術学校近事〔六一五〕^{巻号} M・四一年・二・二六^日

○教授新任 本校雇教員沼田勇次郎氏（號一雅）は、昨年十二月二十三日、教授に任ぜられ、高等官七等に叙せられたり。

○教授休職 本校教授兼文部技師古宇田實氏は、客歳十二月十九日、休職を命ぜらる。

○沼田氏の佛國勳章受領 佛蘭西國政府は沼田一雅氏に對し、オフラフ^{〔オフラフ〕}シエー、アカデミー勳章を贈り越したる趣にて、昨年十一月末、佛國公使の手を経て、同氏は之を受領せられたり。此勳章は、佛國に於て學術技藝に功勞ありしものを受與せらるべき勳章のよし。本校に在りて、創立以來、外國勳章の贈與を受けたる人は、明治廿六年五月、前學長岡倉覺三氏が、バツリヤ國王よりハイリケン、ミツハユル第二等勳章を受けられたることあるのみにして、本邦美術家にありても、氏をもって嚆矢となすべしといふ。

○卒業生の海外實業練習生拜命 本校日本畫科卒業生久野龜之助氏及鑄金撰科卒業生鈴木清の兩氏は、客歳十一月二十八日付を以て、農商務省より海外實業練習生を命ぜられしを以て、一月二十二日の便船にて、本邦を出發し、米國紐育へ向はれしと。

○本校一覽の配布 明治四十年より同四十一年に至る本校一覽は、去る十二月二十三日を以て、本校卒業生一般へ、本校よりそれぞれ贈付せられたり。

○卒業式と展覽會 本校第十七回卒業證書授與式は、來る三月廿八日午前十時より舉行することに内定したるを以て、目下それ／＼準備中なり。又此卒業式に引續きて、廿九日より四月三日迄六日間、久し振りにて、本校内に於て生徒成績品展覽會を開く筈にて、是亦各科各掛に於て、計畫準備中なり。

東京美術学校近事〔六一六〕 M・四一年・三・二六

○久保田前校長の榮轉 前本校長なりし久保田鼎氏は、客歳十二月二十七日、奈良帝室博物館長兼京都帝室博物館長に榮轉せられ、去る一月六日任地へ赴かれたり。

○助手の任命 圖案科卒業生小場恒吉氏は去一月八日、本校雇を命ぜられ、圖案科助手申付けらる。

○職員の名改 囑託平田惣之助氏は、宗幸（從來の號）と改名せられたり。

○生徒募集と試験 本校豫備科並圖畫師範科とも、今年募集すべき生徒の競争試験は何れも來る四月一日より開始せらるべき筈なり。

但し豫備科は其志望の科に依り、募集人員に超過せざるときは、例の如く無試験入學を許可せらるべきなり。

○圖案科其他の教室新築 本校改革の一部として、圖案科、金工科、鑄造科、漆工科並に圖畫師範科に充用すべき教室は、先以て元帝國圖書館の敷地内なる北部（音樂學校に近接の地所）に建設すべき筈にて、昨年來繩張りをなせしが、本年に入りてより其土臺等の築造に取懸りたれば、遠からず巍然たる建物の新築を見るに至るべし。

○沼田〔勇次郎〕教授の紋位 同教授は、二月二十一日、從七位に

紋せられたり。

○故「橋本」雅邦翁銅像建設の議 本校卒業生中に在りて、親しく翁の教訓を承けたる諸氏相謀りて發起人となり、資金を醸集して、同翁の銅像を本校内に建て、永く其功勞を紀念し、高風を遺さんとの議起り、目下夫々協議中にして、此議纏まりなば、學校に於ても、彫刻、鑄造其他成るべく便宜を與ふる趣なれば、不日趣意書等の發表配布を見るに至るべし。

東京美術學校近事〔六一七。M・四一・四・二五〕

○昨年末現在の實業練習生 本校卒業生にして、昨年末現在の、農商務省海外實業練習生を擧ぐれば左の如し。

佛 國

美術工藝圖案(巴里)

出口 清三郎

鑄金術(巴里)

前 島 交 吉

圖案(巴里)

白 瀧 幾之助

木材彫刻(巴里)

畑 正 吉

合成金屬製造色付法

算 定 次

金屬裝飾及印刻術(巴里)

獨逸國

石膏製作(伯林)

山 本 久次郎

英 國

室内裝飾及彫刻(倫敦)

高 村 光太郎

白耳義國

銅器陶器の原型及圖案

武 石 弘三郎

米 國

意匠圖案(紐育)

澤 田 誠一郎

漆器圖案(同)

小 川 三 知

金屬彫刻及工業圖案(同)

田 雜 五 郎

意匠圖案(同)

古 田 土 貞 治

裝飾術(同)

久 野 龜之助

鑄金術(同)

鈴 木 清

漆及漆器製作業(ボストン)

六 角 注多良

清 國

圖案(上海)

毛 利 教 定

英領印度

工藝圖案(カルカッタ)

勝 田 良 雄

○第十七回の卒業證書授與式 三月二十八日午前十時より舉行せられたり。其の式場は會議室(元俱樂部)を以て之に充て、一同着席するや、正木校長は、昨年の卒業式以後の本校に於ける沿革の狀況を述べらる。即ち舊帝國圖書館に本校文庫を移し、校外篤志者にして、相當の紹介あるものにも、圖書標本の閱覽を許すこととなし、又圖書師範科を新設して、専門技術家と、圖書教員たるべきものとの養成方法を區別したること、並に本校改築の緒に就きたること等なり、夫れより卒業生に順次卒業證書を授與せられ、了りて更に卒業生に對して一場の訓示あり。尋で牧野文部大臣は、起ちて左の祝辭を朗讀せられ、之に次ぎて卒業生總代仙石貫造氏答辭を陳べて式を終り、卒業生職員は例によりて撮影をなしたる後、來賓と共に打

科名	本科	撰科	計
日本畫科	八	六	一四
西洋畫科	一三	一二	二五
彫刻科	六	七	一三
圖按科	九	〇	九
鑄造科	一	一	二
漆工科	六	一	七
總計	四三	二七	七〇

○渡邊行義氏の卒業 同氏は故障のため、卒業試験の延期を爲せしが、四月一日、鑄造撰科を卒業せられたり。

○成績品展覽會 本校の展覽會は、去三月二十九日より四月三日まで開催せられ、本館新館には各科の成績品を陳列し、本館階下の一室並に文庫の階上階下には、各種の参考品を陳列せり、詳細の状況は更に記する所あるべし。

東京美術學校近事〔六一八。M・四一・五・二九〕

○島田〔佳矣〕教授の出張 同教授は、栃木縣足利郡教育會の開催にかゝる、圖案講習會の講師として、四月二日より三日間同地に出張せられたり。

○本校の新入學生 本年四月より入學を許すべき豫備科及圖畫師範科入學志願者の撰抜試験は、既記の如く四月一日より施行したるが、本校豫定の人員に超過したる科は、西洋畫科と圖案科とにして、西洋畫科は豫定人員二十五人の約四倍に上り、圖案科は豫定人員

員十人の二倍餘に達し、其他は豫定人數若くは其以下にして、結局左の如く入學を許可せられ、四月十三日より各其授業を開始したり。

豫備科入學者

日本畫科志願

光岡 松次	田鎖 秀	寺門 祐之	小泉 政吉
根岸 庄助	麻畑 重	永田 良亮	柏谷 義一
齋藤 讓	石川 廣助	高橋 卓一	長岡 正夫
田代 猶喜	今尾十一郎	栗原多喜男	中島 研
佐藤 久米	伊藤 順三	山根 泉介	内田他治郎
村岡 敬吉	船越 謙	木實谷喬壽	川路 誠

西洋畫科志願

中尾 春雄	三浦 良勲	田中 泰吉	兒玉直之助
安達 賢治	小原 清吉	川上 四郎	平澤 文吉
鷹野 翬	布目 敏行	藤田 遜	坪井 玄治
竹村 岱造	小山清次郎	森山 肇	三宅 鑑吉
及川 吳郎	蒲生 俊英	在田 稠	前山長次郎
栗山 <small>〔原〕</small> 誠	岡見 富雄	吉村 芳松	樋渡留太郎
濱 哲雄	酒井 榮之	宮崎 定敏	牧野 虎雄
河目 梯二	鈴木 梅月	石坂 武一	

彫刻科志願

金澤彌三郎	安部 然	保岡 熊彦	谷本清太郎
島 庄吉	田邊 孝次	幸崎伊次郎	堀 義二
中谷 宏運	小室 順吉	大坪 宗一	佐々木長次郎
牛窪 恂			

圖案科志願

森田 潔 加藤 俊 板倉 勝磨 岡田 馨
 池田 完次 津村 末男 柴田 貴純 飯野 眞倍
 梶田 惠 瀧川 一則 平野 薫 廣川松五郎

金工科志願

熊谷清太郎 磯野 三郎 星山 勇藏

鑄造科志願

西村 敏彦 樋笠岩太郎 常木 庄藏

漆工科志願

江口 市郎 増川 金松 藤芳 太直 酒卷 洵

圖畫師範科第一年

筑瀬由太郎 ○湧口 滿 宮澤 清 佐藤七之助
 田中 寛 中島英二郎 野口 涉 飯田 文一
 後藤 百治 秋山 任 吉田 久 圓藤 義雄
 中根 孝治 今井伴次郎 安藤 義茂 山岸 貞一
 山本 四郎 ○堀 秋成 岡登 貞治 中澤(津) 安彦

○印は他科より轉科したるものなり。

昨年との比較

科名	昨年の 應募者	本年の 應募者	昨年の入 學許可者	本年の入 學許可者
日本畫	二七	二四	二七	二四
西洋畫	七七	九一	二八	三一
彫刻	一二	一三	一四	一三
圖案	二〇	二二	一〇	一二
金工	八	四	八	三

鑄造 七 三 七 三

漆工 一一 四 一〇 四

師範 三一 二五 一九 二〇

計 一九三 一八六 一二三 一一〇

○生徒の受賞 工業所有權保護協會にて、先頃懸賞圖案を募集せしが、本校生徒の中左の數氏選に上りたりといふ。

指輪圖案壹等賞(金五十圓)

圖案科二年 伊井彌之助

瓦斯灯圖案壹等賞(金五十圓)

同 科二年 高橋昇太郎

七寶引手圖案壹等賞(金五十圓)

同 科三年 辰巳 銀二

同 圖案貳等賞(金三十圓)

同 科二年 伊井彌之助

同 圖案參等賞(金二十圓)

同 科二年 千熊 宇平

東京美術學校近事〔六一九。M・四一・六・一七〕

○授業囑託 圖畫師範科には習字を課することとなり居れるを以て、五月十三日其授業を岡田起作氏に囑託せられたり。

○職員の演習召集 囑託羽田禎之進氏は、五月二十一日より三週間、仙臺市河内歩兵第二十九聯隊へ、助教授石井吉次郎氏は、六月一日より三週間、近衛歩兵第二聯隊へ、書記増井兼吉氏は、六月一

日より二週間、近衛歩兵第四聯隊へ、孰れも演習のため召集せらる。

○正木校長の出張 學校長正木直彦氏は、本校の用務にて、五月十九日より二週間、京都、大阪、奈良の三市へ出張せられたり。

東京美術學校近事〔六一〇。M・四一・七・十二〕

○大博覽會評議員 學校長正木直彦氏は、六月六日、日本大博覽會の評議員を仰付けられたり。

○校友會文學部の講話會 本校校友會文學部の催しにかゝる講話會は、六月六日午後一時より本校内にて開きたり。講師及演題は島村抱月氏の「文藝進歩の方向」佐々醒雪氏の「樂屋落ちの文藝」にして、午後四時散會せり。

○圖畫教授法講習會 本校内に事務所を設けある圖畫教育會は、圖畫教育に貢獻するの趣意を以て、東京市と協議し、五月九日より六週間、毎土曜日午後一時三十分より三時間づゝ、市より撰擇せる東京市内の小學校教員百二十名許の講習會を校内にて開催せり。其科目は小學校の圖畫教授法にして、講師は白濱徵氏なり、六月十三日に至り講習を了りたるを以て當日午後四時より會員百十九人に對し證明書授與式を行ひ、正木〔直彦〕會長より證明書を授與し、東京市よりも教育課長及視學員の臨席ありて、講習會を終りたり。

○故橋本雅邦先生の銅像 いよ／＼本校卒業生にて、故先生の銅像建設計畫をなし、費用六百圓の見込にて、日本畫科並に其他の科の關係ありと認むる卒業生諸氏の中、三百名許りへ、發起人より趣意

書を發送せられたり。卒業生諸氏も多數のことなれば、或は關係ある人へ趣意書發送の脱落も計らざれば、其受取りたる人と否とを問はず、本校卒業生諸氏は奮って贊助ありたきものなり。銅像建設小規は左の如し。

橋本雅邦先生肖像建設小規

- 一、肖像は改築せらるべき東京美術學校の構内に建設すべきこと
- 二、製作は原型鑄造とも東京美術學校に依託すること
- 三、肖像は三尺五寸の胸像（凡等身大）とし臺は花崗石を用ひ高凡九尺とし發起人に於て相當の設計を爲すこと
- 四、建設費用は凡金六百圓とし計畫の主要及收支決算等は寄付者一般に報告すること
- 五、寄付金は本年末を以て締切りとし出金方法は一時に全額を寄付し或は數回に分割寄付し若くは月割寄付とするも差支なきこと
- 六、寄付金は便宜上東京美術學校内屋代鈔三へ御送金を願ふこと
- 七、寄付者の芳名及金額は永久に傳ふる方法を採ること

東京美術學校近事〔七一。M・四一・九・三〇〕

○職員の動靜 其後の分左の如し。

六月四日、教授高村光雲氏は古社寺寶物調査のため、三週間滋賀縣へ出張せらる。

同月二十三日、教授白濱徵、囑託小島憲之、同上原六四郎、同岡田起作の諸氏は、文部省の教員檢定委員會臨時委員仰付けられたり。

同月三十日、教授正五位黒田清輝氏は、從四位に叙せらる。

七月四日、助教結城貞松氏は、京都府奈良縣へ、雇小場恒吉氏は奈良縣へ、何れも學術研究のため出張を命ぜられたり。

七月十七日、教授白濱徵氏は、文部省より、師範學校教授要目取調委員を囑託せられたり。

七月二十四日、教授石川光明氏は、京都府及滋賀縣へ出張を命ぜらる。

八月二十五日、囑託關係之助氏は、陸軍省より靖國神社附囑遊就館物品陳列事務を囑託せられ、同時に同館整理委員を命ぜらる。

九月九日、例に依りて各科卒業期生徒、奈良京都等へ修學旅行に付き、囑託關係之助、助教玉田文作、同鶴田幾太郎、雇中島新助の四氏は、此日京都府奈良縣滋賀縣へ出張を命ぜられたり。

○教授助教の任免 日本畫科に於ける教授荒木寛畝、同下村晴三郎の兩氏は、八月二十九日何れも依願本官を免ぜられ、小堀輻音氏は、同科擔任として同日教授に任ぜられ、高等官七等に叙せられ、

松岡輝夫氏は、九月八日、同科擔任の助教に任ぜられ、福井信之進（號江亭）氏は九月十六日、同科教授に任ぜられ、高等官七等に叙せられたり。

○本校内に於ける講習會 文部省にては例年の如く本年夏期を利用し、本校を以て會場とし、圖書館に關する事項の講習會を開催した

り。開期は七月二十五日より二週間、講師は帝國圖書館長田中稻城、文部技師久留正道の兩氏なりき。

○特待生選定 本校規則第二十七條により本年九月以降一學年間の特待生として、左の諸氏選定せられたり。

福島外喜雄（日一） 楠本 秀男（日二）
吉田 清二（日三） 香川 敬事（日四）
竹田豐太郎（日四） 神津 港人（西一）
大野 隆徳（西二） 田邊 至（西三）
金山 平三（西四） 加藤 孝三（彫一）
和田 順顯（圖一） 小川 正雄（圖二）
飯田徳三郎（圖三） 日吉 守（圖四）
加藤 卓爾（圖四） 寺島 恕（金一）
北原 千禰（金二） 神谷甚一郎（金四）
香川源四郎（漆一）

姓名の下の（日一）は日本畫科第一年を示し、級別は去六月の學年試験の際に依る、以下之に倣ふ。

○精勤賞狀授與 本校にては、前學年中學業を精勵したる左の諸氏へ、精勤賞狀を授與せられたり。

森山驥三郎（日撰二） 田邊 至（西三）
田中 良（西三） 加藤 靜兒（西三）
新田藤太郎（彫一） 木原 茂（彫撰一）
井上 直伍（彫撰三） 牧野 國助（彫撰三）
飯田徳三郎（圖三） 神矢 教親（金一）
原田 縫吉（金撰三） 神谷甚一郎（金四）
時岡鐵次郎（鑄撰二） 三野 吉明（漆一）
木村 清（漆二） 高中 文助（漆四）

○豫備科修了者 本年四月入學の豫備科生徒にして、去七月の終了試験に合格し、九月十一日より各本科へ入學を許されたる諸氏は左

の如し。

日本畫科(十九人)

永田 良亮	今尾十一郎	川路 誠	内田他治郎
小泉 政吉	柏谷 義一	田鎖 秀	栗原多喜男
船越 謙	村岡 敬吉	木實谷喬壽	根岸 庄助
田代 猶喜	中島 研	高橋 卓一	伊藤 順三
麻畑 重	佐藤 久米	光岡 松次	

西洋畫科(三十人)

前山長次郎	中尾 春雄	田中 泰吉	兒玉直之助
平澤 文吉	坪井 玄治	森山 肇	三浦 良勲
牧野 虎雄	酒井 榮之	小原 清吉	藤田 遜
河目 悌二	布目 敏行	三宅 鑑吉	濱 哲雄
鈴木 梅月	蒲生 俊英	吉村 芳松	宮崎 定敏
栗原 誠	安達 賢治	小山清次郎	鷹野 翬
在田 稠	樋渡留太郎	竹村 岱造	川上 四郎
及川 吳郎	石坂 武一		

彫刻科塑造部(九人)

堀 義二	谷本清太郎	島 庄吉	金澤彌三郎
幸崎伊次郎	田邊 孝次	安部 然	保岡 熊彦
中谷 宏運			

同科木彫部(三人)

小室 順吉	大坪 宗一	佐々木長次郎
-------	-------	--------

圖按科(十一人)

廣川松五郎	森田 潔	板倉 勝磨	岡田 馨
-------	------	-------	------

柴田 貴純	加藤 俊	津村 末男	瀧川 一則
飯野 眞悟	平野 薫	梶田 惠	

金工科(三人)

星山 勇藏	磯野 三郎	熊谷清太郎
-------	-------	-------

鑄造科(三人)

常木 庄藏	樋笠岩太郎	西村 敏彦
-------	-------	-------

漆工科(四人)

增川 金松	酒卷 洵	藤芳 太直
-------	------	-------

〔月報第六卷第八号では江口市郎〕
江川 市郎

○撰科入學試験 本年募集したる撰科は、日本畫撰科に六人、彫刻撰科塑造部に四人、同科木彫部に三人、同科牙彫部に三人、金工撰科に三人、漆工撰科に四人にして、何れも去る七月の官報に廣告せられたるが、其入學試験は九月十四日より施行せらる。

○生徒の懸賞圖案受賞 圖案科卒業期生徒番匠勇作氏は、去七月日本圖案會の吳服裝飾用札紙懸賞圖案の一等賞(賞金二十圓)に當選したりと。

○各科卒業期生徒修學旅行 例により本校各科卒業期生徒二十九人は、學術實地研究のため、關「保之助」講師、玉田「文作」鶴田「幾太郎」の兩助教、雇河合新助の諸氏付き添ひ、九月十四日午後七時半新橋を發し、奈良縣下より京都府下滋賀縣下へ向ひて修學旅行の途に上りたり。

○白濱「徵」島田「佳矣」兩教授の出張 兩教授は今夏季各地の講習會に招聘せられたるが、白濱教授は圖畫教授法の講習のために、

大坂市、福岡縣折尾村、同縣久留米市、大分縣大分町、香川縣綾歌郡坂出町、宮城縣玉造郡溫泉村等へ、島田教授は圖案及工藝品製作上の講習のために、山形縣、秋田縣へ出張せらる。

○夏季休業中の職員動靜 夏季休業中旅行せられたる諸氏を擧ぐれば、和田英作氏は靜岡縣の江尻町に五週間許り滞在、寺崎廣業氏は鎌倉長谷に滞在、上原六四郎氏は韓國京城へ、海野美盛氏は茨城縣磯濱へ、乙竹岩藏氏は郷里なる三重縣伊賀國上野町へ、羽田禎之進氏は茨城千葉兩縣下へ、川端玉章氏は鎌倉の別荘へ、大村西崖氏は九州地方へ、竹内久一中村勝次郎兩氏は相馬地方へ、白山松哉氏は伊豆修善寺へ、黒田「清輝」久留米「久米桂一郎」岩村透の三氏は新潟縣より山形秋田の兩縣下へ旅行せられたりと。

東京美術學校近事〔七一。M・四一・一〇・二七〕

○撰科生の入學 本校に於ては前號所報の如く九月十四日より、各撰科の入學試験を施行せられたるが、その結果入學を許されたる諸氏左の如し。

日本畫撰科（受験者二十一人）

内藤敬三郎 中村 恒吉 鈴木六三郎 太田 福藏
山田龍太郎 上林 重徳 朴 鎮榮

西洋畫撰科（特別詮議）

白 常齡 陳 之駟 野元 義雄

彫刻撰科塑造部（受験者七人）

井上 久次 渡邊 信助 山本 豊 藤田 龜久

同科木彫部（受験者一人）

志摩 鶴二

同科牙彫部（受験者二人）

佐瀬芳之助 橋本 武夫

金工撰科（受験者二人）

能守安太郎 水沼 靜

漆工撰科（受験者一人）

溝淵好三郎

上記の内「朴鎮榮」は朝鮮國人、「白常齡」及「陳之駟」は何れも支那人なり。

○日本畫科教授法の改正 本校日本畫科の教授荒木寬畝、下村觀山の兩氏去りて更に教授としては、小堀鞆音、福井江亭の兩氏 助教としては、松岡輝夫氏の入るありしは、前號所報の如くなるが、正木「直彦」校長は此際日本畫科の教授法を改正し、從來本館新館の二教室に分ちて教授したりしを、更に三教室に分ち、第一教室は川端「玉章」教授、福井教授の擔任とし、第二教室は寺崎教授、結城助教の擔任とし、第三教室は小堀教授、松岡助教の擔任とし、各受持教員の流派を土臺として修學發展に努めしむることゝなせり。而して猶將來に在りては、同科に於ては、時々一般の競技をなさしめ、技術の優等なるものは假令五ヶ年の年限を経ざるも卒業せしむるの規定を見ることあるべしといふ。今前記三教室に志願したる生徒の區別人員を擧ぐれば、左の如し。

學年 第一教室 第二教室 第三教室 計

第一年 六 一九 七 三二

第二年	四	一一	四	一九
第三年	〇	八	九	一七
第四年	七	九	八	二二
卒業期	〇	二	一〇	一二
研究科	〇	三	一	四
計	一七	五二	三七	一〇六

○本校設置紀念式 本校創立滿二十年の紀念式は例の如く十月四日舉行せられたり。式場は會議室（元校友會俱樂部）にして、正木〔直彦〕校長は壇に立ちて式辭を述べられ、又本校生徒たるものは、時流を逐はず、専心修養を怠るべからざる旨を説かれ、次て高村〔光雲〕教授は本校創立當時の狀況の一斑を語られ、餘興として松林伯知の柳生但馬守の一節と、近藤登の助の繪事の講談一席ありて後、午餐を喫して暫時休憩し、それより薩摩琵琶の名手永田錦心の小督及那須與一の二曲あり。時既に三時なりしかば一同退散せり。聞く所によれば當日卒業生諸氏の來會者は例年に倍加したりといふ。

東京美術學校近事〔七—四。M・四一・十二・二四〕

○古宇田教授の除隊 昨年入營せし休職古宇田〔実〕教授は、先頃來久しく病氣のため療養中なりしが、遂に十一月末病氣の故を以て、現役を免せられ除隊せられたり。

○新築工事の進捗 文庫の北側に新築中なる圖案科、金工科、鑄造科、漆工科、及化學教室の工事は、先頃來漸次に捗りて、目下既に

柱建を了りたれば、順次に内部の造作にも及ぼすべく、室内に於ける水道瓦斯の取付等の協議も済みたる由なれば、來年四月花咲頃には竣成すべしといふ。其新築教室は二棟より成り、一は凹字形をなして文庫の東北に建つを、圖案、金工、鑄造、漆工諸科の教室とし、その階上階下を各科に配當す。一は文庫の西北に建ち、くの字形をなす、これを化學教室とし、應用化學に關する設備はいふに及ばず、寫眞室、製版室をも兼備せり。又此新築教室にして落成せば、一と先づその當該各科と、日本畫、西洋畫、彫刻の一部をも併せて此に移し、從來の本館新館及彫金漆工等の教室を取毀ちて、目下の工藝科の處とその前の廣場にかけて、日本畫、西洋畫、彫刻科の教室を改築することゝなる譯なりといふ。

東京美術學校近事〔七—五。M・四二・一・三一〕

○正木校長の敘勲 本校長正木直彦氏は、客年十二月二十五日付を以て、勲四等に敘せられ、瑞寶章を授けらる。

○小堀教授の敘位 教授小堀鞆音氏は、十二月十一日、從七位に敘せらる。

○文部省委員の任免 教授白濱徵氏は、十二月十四日、文部省の師範學校教授要目取調委員囑託を解かれ、同日、文部省視學委員を命ぜられたり。

○本校成績品展覽會 本校にては本年三月廿八九日頃より四月へかけて一週間、各科成績品展覽會を開く筈なり。

○授業始式 本校に於ては例年の如く、一月八日午前十時より授業

始めの式を行ふ。式は 御影奉拜に始まり、勅語並に昨年十一月に下し賜ひたる 詔勅を捧讀し、次で、正木「直彦」學校長は、詔勅の旨を躰して、職員生徒は勤儉自ら持し、自彊已まざるの覺悟を以て此新年を迎へ、奮勵努力せざるべからざる旨、告辭を述べられ、兩陛下の萬歳を三唱して式を終りたり。

○職員を送迎會 本校職員一同は、舊臘十二月十九日を以て、荒木「寛敏」、下村「觀山」、辻村「延太郎」の三教授及藤本「万作」囑託教員の先般引退せられたると、古宇田「実」休職教授の退營せられたるとに依り、その送迎會を催し兼て忘年會を開きたり、場所は公園内常盤華壇にして、會するもの五十名許りなりしといふ。

○本校一覽の配付 本校一覽は舊冬それぞれ配付の都合なりしも、印刷間に合はず、此程に至りて漸く出來せしを以て、例に依りて本月下旬には卒業生一般に配付せらるべし。

○職員の義捐 先般伊太利に於ける震災の慘狀救助に充つるため、本校職員諸氏は相謀り、金貳拾五圓を醸金して救濟金の中に納付したりといふ。

関連事項

① 帝国図書館敷地・建物移管

明治四十一年三月、隣接する帝国図書館敷地のうち本校敷地に喰込んでいた部分三七〇〇坪と建物三棟（煉瓦造り三階建倉庫、木造二階建閲覧室、煉瓦造り二階建倉庫）が本校所管に移された。建物の方は既に同三十九年五月に本校が帝国図書館より借用し、文庫として使用していたものである。明治四十年より文部省は本校の大規模な

改築計画に着手しており、これとの関連で敷地の移管が行われたものと考えられる。

② 成績品展覽會

明治四十一年三月二十九日、即ち卒業式の翌日より四月三日まで校内で成績品展覽會が開かれた。一般公開は明治三十五年以来のことであった。展示物は日本画科生徒の平常成績（写生、臨画、新案）と卒業製作および四教授の作品、西洋画科の三、四年生の平常成績（コスチューム、静物画）と一、二年生の平常成績（木炭画、静物画）、卒業期制作（随意題）、卒業制作（自画像）、彫刻科、図案科、金工科、鑄造科の平常成績と卒業制作および参考品、図画師範科の図画、手工作品（木炭画、鉛筆画、毛筆画、粘土細工、造花）および「教育的作品」、参考品（旧教官作品、明治二十六年〜同四十年彫刻科卒業制作、現職彫刻教官作品、本校所蔵古美術品、住友家依囑大阪図書館青銅額）等々でこれらが本館、新館、文庫閲覧室および書庫に陳列された。成績品の出品は六百四十五点で、そのうちの三十七点が売約となり、また、各科の即売所（絵葉書、風呂敷、手拭、ハンカチ、石膏品、裝飾兼実用品）では絵葉書が飛ぶように売れた。総入場者数は一万三千四百四十四人。一日平均二千二百三十五人の入場があった。

この展覽會で特に一般の関心を惹いたのは日本画科と設置後六ヶ月たった図画師範科で、前者については『東京美術学校校友會月報』第六卷第八号所載「我校の成績展覽會」中に次の記述がある。

新館〔下村觀山、鶴田機水指導の新館教室〕の作品は、寫生、臨